B-71

両側自然気胸3例の検討
静岡県立総合病院 呼吸器外科
○八田則夫、杉村久雄、岡部 健、長島康之

目的、対象：自然気胸の臨床に於て両側気胸の発症は治療と予後を面で重要ある課題である。過去6年間に於ける両側自然気胸23例につき検討を加えた。

結果：両側自然気胸の頻度は全気胸264例中39例14.8％で、両側同時気胸は1例のみであり、他は両側間気胸であった。性別は男38例、女1例と圧倒的に男性に多く、年齢は、発症初診時10歳台14例、20歳台11例、30歳台3例と若年層が多い。治療法は、両側開胸術を施行したもの23例、片側のみ開胸術を施行したもの1例、両側とも保存的に治療したもの2例であった。異時性気胸では、一側術後対側気胸発症例が24例62.5％と鈍速を占め、その間隔も術後3年以上に両側気胸を発症したもの14例63.3％であった。また手術で気胸囊腫が確認されたものは、記載の明らかに30例中両側開胸術は16例中14例、片側開胸術は14例全例であった。

術後：両側自然気胸の頻度は決して少ないものではなく、特に一側開胸術後短期間に対側気胸を発症する例が多いため術中、術後を通じて充分な配慮が必要と考えられる。

B-73

両側性月経随伴性気胸の手術治療例
東北大学抗酸菌病研究所外科
○岡田正典、半田政志、穂積浩久、田中勝男、藤村重文

術後：自然気胸の発症例は39例であるが、我々は過去、両側性に発症しました本症例を、二期的に開胸術を施行したので報告する。

症例は28歳、既婚女性。月経時に繰り返す胸痛を主訴として来院した。過去3回、月経時に、胸部X線写真上右の気胸が認められている。右開胸所見では、肺にはブドウ球、ブドウ球ではなく、横隔膜部に多数の黒褐色の陥凹部が認められた部分を切除した。切断標本の病理検査では異所性子宮内膜症の所見が認められた。術後3日目と4週目の術後月経時、胸部X線写真上、左側に気胸が認められた。左側も月経随伴性気胸と診断し、左側開胸術を施行した。右側胸膜剝離は、ブドウ球等は認されず横隔膜縁に異性性子宮内膜症とみられる黒褐色塊があると認められ、この部分を切除した。術後経過は良く、次回の月経時に気胸の再発は認められなかった。以前より、骨盤内側腹膜、壁、腹膜下に子宮内膜症が認められたため、現在LH-RH analog療法にて加療中である。

術後4ヶ月間、再発は認められていない。なお、本症例に関して、本邦報告37例についての検討を加えた。

B-72

PSS+SLEで長期ステロイド治療中の症例に合併した再発性自然気胸の一術例
藤田学園保健衛生大学胸部外科
○中村 基、杉村修一郎、小澤勝男、入山 正、服部正信、佐井 昇、根木浩路、松田昌浩、松山孝昭、平野美紀、武田 功

症例は25歳の女性、全身の皮膚硬化性、肺の拘束性障害、Raynaud現象、関節創傷、指頭潰瘍、等を認めた。皮膚発症を加えてPSSと診断し、さらにWBC減少、butterfly rash、抗核抗体陽性、等よりSLEとのoverlap症候群として、昭和57年ごろよりprednisoloneを投与されていた。昭和57年より左右自然気胸を繰り返し、昭和68年6月に再発した。tube thoracostomyによる保存的療法ではair leakを止まらず、昭和68年8月25日に手術を施行した。手術前日まで通常どおり15mg/dayのprednisoloneを内服させ、術後は静脈にてsteroidの投与を続けた。

術後7日目にdrainを抜去し、12日に抜去したが、肺は開いているために再縫合を行った。

術後詳細には、肺の萎縮の程度などと肥厚が著しく、肺自体による肺機能に著変した自然気胸を考えた。

組織所見および長期steroid投与による免疫能の低下などを考慮すると、通常の保存的療法より、早期の外科療法が有効であると考えられた。術後に小児性の肺塞栓症と診断し、steroid投与による創治療の整延期および感染に対する注意深い配慮が必要である。

B-74

小児囊胞性肺疾患の臨床的検討
大阪大学医学部第一外科
○中川勝裕、中原数也、藤井義敏、松本友秀、木田俊雄、明石常等、武田伸一、南 正人、藤原清光、早川正宣、山本文夫、西山 誠、川内康生

目的：小児囊胞性肺疾患の臨床像を分析し、緊急手術の特徴を検討した。

対象および方法：1955年から1989年までに気管支原性肺嚢胞症15例（2例は囊胞性肺癌症）、肺気腫肺嚢胞症4例、CCAM 5例、肺分画症 5例を経験した。平均年齢5.8歳、男性17例、女性12例であった。

成績：手術術式は一葉切除術18例、肺全摘除術4例、肺部分切除術4例、肺全摘除術、二葉切除術、区域切除術、各1例であった。このうち5例（肺気腫肺嚢胞症2例、肺気腫肺嚢胞症1例、CCAM 2例）は緊急手術を行った。これらは全例1歳未満で呼吸機能不全でであった。待機手術例は1歳未満5例、1歳以上19例で、症状は機能反復性呼吸器感染症または循環不全であった。

緊急手術例では脳梗塞例を全例に認めたものに対し、待機手術例では1例以下19例中1例のみであった。手術術式は、右肺中葉切除術3例、右肺全摘除術7例で、右肺全摘除術4例、左肺全摘除術4例、左肺全摘除術、区域切除術、各1例であった。